俊成「よそへ」の方法

紙　宏行

一

歌論書の多くは、和歌の本質論や理想の和歌のありかたについて述べ、さらに、それに対応させて、何らかの形で、和歌表現の世界の具体的な記述を展開している。それは、各歌論書によって、さまざまの記述のしかたがあり、歌語の解釈や古歌の伝承故実を述べるものや、定家歌論では秀歌撰ということになろうが、『古今集』仮名序では、季節を逐って和歌の表現世界の例を網羅的に記述した部分（次にとりあげる「花にそふとてたよりなき所にまどひ」以下）がそれにあたる。この形は、以後の歴代勅撰集の序に踏襲されるほか、『俊頼髄脳』や『古来風躰抄』にも採り入れられている。和歌本質や理想の和歌の論は、ともすれば、抽象論・理想論になりがちであるが、和歌世界の具体的記述と照応し合うことによって、和歌本質や理想のありかたが、どうすれば具体的な表現として実現しうるかの方法論が明確になってゆく。抽象理論から具体的実践へと展開し、双方が照応し補完し合って、ひとつの思想なのである。

『古今集』序冒頭のあまりに有名な一節からとりあげたい。

やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて言ひいだせるなり。

まず、第一文で、和歌の本質は抒情であることを、植物の比喩によって述べ、次の文で、抒情の方法について述べている。その第二文を、

見るもの聞くものにつけて→心に思ふことを言ひいだせるなり

と語順を並べ換えて図式化してみるとわかりやすい。現実のさまざまな事物（→印をはさんで前項）「につけて」、「心に思ふことを」表現した（後項）という図式である。前項の現実に存在する景物をモチーフとして、後項の心情を主題的に表現するということになる。『万葉集』の用語を借りていえば、〈寄物陳思〉である。鈴木日出男氏は、「和歌の原初的な表現法が、〈寄物陳思〉にあり」、〈正述心緒〉はそこから派生した後発のものであると、『万葉集』の諸作を検討、『古今集』の歌や仮名序の右の記述を分析して説いた。[1] 卓見というべきであろう。〈寄物陳思〉が「和歌の原初的な表現法」であるとするのは、『古今集』序の著者の思想でもあること、冒頭に和歌の本質は抒情であることを述べ、すぐに続けて、その表現方法を〈寄物陳思〉であると述べている記述のしかただけからもうかがえる。

本稿が問題としたいのは、そのこと自体ではなく、「見るもの聞くものにつけて」というときの、「～につけて」が意味する抒情の方法論である。現実に存在する景物に、心内に思うことを対応させて

主題的表現として結実するしくみである。それが、「和歌の原初的な表現法」であるとするなら、その内実を明らかにすることによって、「和歌の原初的な」存在のありようも明らかになってこよう。

動詞「つく」について、『類聚名義抄』には、「付」「託」「諷」「約」「寓」「因」などの字が、「ツク」と訓ぜられており（これ以外にも「着」「突」「撞」ほか多数）、字面を見ていると、さまざまな意味が予想されて興味深いが、逆に、容易に語義を定めがたい状況を思わせる。

『源氏物語』には、

をさなごこちにも、はかなき花紅葉につけても、こころざしを見え奉り、　（「桐壺」巻）

という例がある。これは、「かこつけて」などと注釈がなされている[2]が、『古今集』序の和歌表現方法の図式と照らし合わせると、奇妙に一致する。前項はいずれも現実の景物で、後項は「言ひいだせるなり」と「見え奉り」との相違だけである。若き光源氏が、藤壺宮にどのような方法で「こころざしを見え奉」ったのか、歌を詠みかけた可能性が高いが、日常生活における人と人との交流、和歌詠作という文芸行為とのアナロジーに、「～につけて」の方法の多様性を見るべきであろう。

なお、真名序は、冒頭部を、

夫和歌者、託其根於心地、発其花於詞林者也。

としている。「～につけて」にあたるのは「託」の字であろう。『類聚名義抄』には、

託　ツク　ヨル　累
　　ワサウフ　オコル　寄

と訓が付されている。「つく」ほか「よる（よす）」については、後に考察するが、仮名序の思想と変わりはないものとしておく。

二

以上をふまえ、仮名序の和歌表現の世界を記述した部分を見ていきたいが、先の「～につけて」の方法の図式をこの記述にあてはめ、前項と後項に解体し、箇条書ふうに引用する。○印は該当する語句がないことを示す。

①花をそふとて　　→たよりなき所にまどひ
②つきを思ふとて　　→しるべなきやみにたどれる
　　⬇心々を見給ひてさかしおろかなりとしろしめしけむ
（しかあるのみにあらず）
③さざれいしにたとへ　　→　○
④筑波山にかけて　　→君をねがひ
⑤　○　　→よろこび身にすぎ
⑥　○　　→たのしび心にあまり
⑦富士のけぶりによそへて→人を恋ひ
⑧松虫のねに　　→友をしのび
⑨高砂住の江の松も　　→相生のやうにおぼえ
⑩男山の昔を思ひ出でて　　→　○
⑪女郎花のひとときをくねるにも→　○
　　⬇歌を言ひてぞなぐさめける
（また）
⑫春の朝に花の散るを見　　→　○
⑬秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き→　・○
（あるは）
⑭年ごとに鏡の影に見ゆる雪と波とをなげき→　○
⑮草の露水の泡を見て　　→我が身をおどろき

（あるは）

⑯　○　　↓昨日は栄えおごりて、時を失ひ、世にわび、親しかりしもうとくなり

（あるは）

⑰松山の波をかけ　　↓　○

⑱野中の水をくみ　　↓　○

⑲秋萩の下葉をながめ　↓　○

⑳暁の鳴の羽掻きを数へ　↓　○

（あるは）

㉑呉竹のうきふしを人にいひ↓　○

㉒吉野川をひきて　　↓世の中を恨みきつるに

㉓今は富士の山も煙たたずなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は　　↓歌にのみぞ心をなぐさめける

このようにして見ると、〈寄物陳思〉の思想の具体的なありようが明確になる。「～につけて」と同格的に対応するのは、①「～をそふとて」④「～にかけて」⑦「～によそへて」㉒「～をひきて」の部分に該当する。これらが「～につけて」の方法論の内実を表している。

右の③から㉒は語句は、『古今集』入集歌の表現に基づいて記述されているのはよく知られているが、このうち、前項と後項がそろっているもの（○印のないもの）について、基づいている歌をあげ、前項と後項との関係を調べてみる。

④筑波嶺のこのもかのもに蔭はあれど君がみ蔭にます蔭はなし
（東歌・一〇九五）

⑦人しれぬ思ひをつねにするがなる富士の山こそわが身なりけれ
（恋一・五三四）

⑧君しのぶ草にやつるるふるさとは松虫のねぞ悲しかりける
（秋上・二〇〇）

⑨われ見ても久しくなりぬ住の江の岸の姫松いく世へぬらむ
（雑上・九〇五）

たれをかもしる人にせむ高砂の松も昔の友ならなくに
（雑上・九〇九）

⑮露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりぞ
（哀傷・八六〇）

うきながら消ぬるあわともなりななむ流れてとだにたのまれぬ身は
（恋五・八二七）

㉒流れては妹背の山のなかにおつる吉野の川のよしや世の中
（恋五・八二八）

④は、筑波山の木陰につけて、君がみ蔭を讃えた歌であるが、ふたつの「かげ」の関係は掛詞（同一の語なので、一語二役というべきか）、⑦の富士山の煙と恋するわが身との関係は「する」の掛詞による序詞、および、情熱に身を燃やす、こがすということで比喩であり、⑧は「しのぶ草」と「君しのぶ」との掛詞、⑨の松とわが老の身との関係はどのように捉えればいいのか、松を永遠の比喩とする伝統をもとにした比較の対象とでもいうほかない。

⑮の露や泡とわがはかなき身とは、比喩または比較の対象ということになる。「うきながら」の歌については、『顕注密勘』の顕昭注に、

「うきながら消ぬるあわ」とは、水のあわのうきながら消えぬるなり。けぬるとは消えぬるなり。うきをば心うきにそへたるなり。さだまれるそへ詞なり。流れて末の世にあふべきといふたのみもなければ、ただ死なむとなり。

と注されており、掛詞の関係もある。ここではそれを「そふ」の語

で言い表している。㉒も掛詞の関係であるが、『顕注密勘』の顕昭注に、

男女の仲らひは、仲らひてよきことはなきなりといふ心をそへてよめるなり。（以下略）

とあり、これも「そへてよ」んだ歌であると注釈しているが、例の図式になぞらえてみると、

妹背の山の吉野の川にそへて→仲らひてよきことはなきなりといふ心をよめるなり

と詠んだものと解しているのである。

『古今集』序は歌の原初的なありようを「見るもの聞くものにつけて→心に思ふことを言ひいだせるなり」と説いていたのだったが、どのような方法で「～につけて」詠んだか、比喩あり、掛詞あり、比較の対象ありと実に多様なのであった。

「～につけて」と同格的に用いられている語には、「～にそへて」「～によせて」「～によそへて」などがあった。『源氏物語』「宿木」巻にも、

木草の色につけても、水の流れにそへても、涙にくれてのみなむ帰り待りける。

という例があり、「よそへて」が「つけて」と並立させ同義語として用いられている。また「桐壺」巻には、

花鳥の色にも音にも、よそふべき方ぞなき。

とあり、前に引いた同巻の「はかなき花紅葉につけても」の文と照合してみると、これも「よそへて」の語が「つけて」と同格に位置付けられていると考えることができる。

これらの語は、それぞれが多義的な語で、ひとつの概念にまとめてしまうのは乱暴なことなのかもしれないが、ここまであげてきたさまざまな用例に関しては、次のようなことがいえるだろう。まず、⑦と⑮の見立てについて、⑦でいえば、富士山の煙に恋するわが身を見立てているが、結びつくはずのない両者を結びつけているのは、様態の「燃やす、こがす」という共通点である。⑮では、露や泡とわが身とを「はかなさ」という属性の類似点で結びつけたのである。このように、「～につけて」の方法は、結びつくはずのないものを、何らかの共通点や類似点で結びつけていくということである。[3] 方法的な関係づけである。『古今集』の例の図式に即していうと、「心に思ふこと」を「見るもの聞くもの」に関係づけたのである。[4]

掛詞についても同様のことがいえ、④では「かげ」の音の共通性によって筑波山と帝の恩寵とを、⑧は「しのぶ」の音の共通性によって、植物と君への思いとを結びつけている。同音による関係づけで、原初的には、名づけと言い換えることも許されよう。

「～につけて」の方法論の意味するところは、きわめて多義的というより、ひとつの包括的な概念というべきであろう。〈寄物陳思〉という『万葉集』の用語も、この場合、正確ではない。〈比喩〉などという西洋の修辞学の概念ではとうてい蔽いきれないし、見立て、掛詞、序詞といった、現代の和歌の修辞を指摘するための用語によっても、こぼれ落ちるものが多く出てくる。「見るもの聞くもの」に対して、様態や属性、または同音など、あらゆる形で「心に思ふこと」を関係づける、名づける、これを和歌の基本的な方法と考える、というのが本稿の結論である。[5]

しかし、「見るもの聞くもの」を文字通りに見たり聞いたりした現実に存在する景物と解するのは単純素朴にすぎようし、「心に思ふこと」も割り引いて考える必要があろう。前の⑦について、様態の共通性によって、富士山の煙と恋するわが身とを関係づけたと述べたが、様態というより、「燃やす、こがす」ということばの同一性であるというべきであった。⑮も、松を老の比喩とするのは、和歌

表現の伝統に基づいている。「見るもの聞くもの」も「心に思ふこと」も、ともに類型的、閉鎖的な和歌のことばに、はじめからからめとられている。歌のことばは、始原のことばであり、そこに枠づけられることによってのみ、和歌は成立している。名づけ、関係づけも、多くはことばそのものから発生したものである。鈴木日出男氏が、掛詞、序詞、縁語、見立ては「言葉じたいに即した方法」と述べた[6]ごとくであり、『古今集』の歌々がそのことを明確に示している。ここで強調しておきたいのは、『古今集』序が、素朴な抒情を和歌の本質と考え、それを原拠として、その方法を「～につけて」の抒情方法であると主張していたということである。

三

『俊頼髄脳』の和歌表現の世界を具体的に記述した部分は、「歌を詠まむには、題をよく心得べきなり」という題詠論に続け、「たとへば」として題のよみかたを具体的に例示した部分にあたる。これも『古今集』序にならって図式化して引用するが、いたずらに長くなるのを避け、春の部のみにとどめておく。上には題を示す。

春の朝にいつしかと詠まむと思はば　①佐保の山に霞の衣をかけつれば　→春の風に吹きほころばせ

（霞）　②峰のこずゑをへだてつれば　→心をやりてあくがらせ

（梅）　③梅のにほひにつけて→鶯をさそひ

（子の日）　④子の日の松につけても　→心の引くかたならば千年をすぐさむことを思ひ

（若菜）　⑤若菜をかたみに摘みためても　→心ざしのほどを見え

（残雪）　⑥のこりの雪の消えうせぬるに　→我が身のはかなきことを嘆き

花咲きぬれば　⑦　○　→ひとり心のしづかならず

⑧白雪にまがへ　→春の雪かとおぼめき

⑨　○　→心なき風をうらみ

⑩　○　→人ならぬ雨をいとひ

（青柳）　⑪青柳の糸に思ひよりぬれば　→思ひ乱るともくりかへし

⑫　○　→木のもとに立ちよらむことをいひ

（早蕨）　⑬草萌えいでむにつけても　→早蕨をうたがひ

『古今集』仮名序よりも、記述のしかたは詳細に、具体的になっている。しかし、③④⑬に「～につけて」と書かれているように、「～につけて」の方法は『古今集』序と同じである。モチーフとして、「見るもの聞くもの」という現実の景物と、与えられた歌題であることとには、大きな隔たりがあるが、モチーフはともかく、方法的には意外に近いところにあると考えてよいのではないか。『俊頼髄脳』については、この程度にとどめておきたい。

四

俊成『古来風躰抄』の和歌表現の世界を具体的に記述した部分は、下巻冒頭にある。

歳月の改まり変はる花紅葉につけても、歌の姿詞は思ひよそへられ、そのほど、品々も見るやうにおぼゆべきものなり。

ということばに始まり、次に、四季、恋、雑の順に記述して、

歌の姿心も、ただかやうによそへて心得れば、まことに姿高く、清げにも、艶にも、優にも、またさまでならでも、ひとふしをかしきさまも、ほどほどにつけつつ、よそへられぬべきことなり。

と結んでいる。このふたつの文を序と跋のようにして、和歌表現の具体的世界を包むかっこうになっている。この二文に、俊成の和歌世界の捉えかたがうかがえようというものである。

冒頭部を例の図式に従って『古今集』序とくらべてみると、

見るもの聞くものにつけて→心に思ふことを言ひいだせるなり

歳月の改まり変はる花紅葉につけても→歌の姿詞は思ひよそへられ

となって、みごとに対応している。『古今集』序の「見るもの聞くもの」が歌を詠むモチーフであるとすれば、『古来風躰抄』「歳月の改まり変はる花紅葉」もやはりモチーフとすべきで、『古今集』序「心に思ふことを言ひいだせるなり」が、和歌の本質を抒情であると主張する部分であるなら、『古来風躰抄』の「歌の姿詞は思ひよそへられ」も和歌の本質の何たるかの主張とすべきであろう。『古今集』序を意識的にふまえた叙述といえるが、『古今集』序は「つけて」と同義として「そへて」が用いられていたのに対し、『古来風躰抄』では後項に用いられていて、「思ひよそへられ」はあたかも歌を詠むことそのものをも意味しているような記述となっている。

このことは跋的な第二文に見える二例の「よそふ」の用法にもあてはまる。順に「歌の姿心」「さま」を「よそふ」としており、歌の心・詞・姿を「よそ」い、その結果として、歌の様式上の差異が生じると言う。歌の心・詞・姿は「よそ」って、生成されるというのが、俊成の思想である。

「よそふ」は、本来、方法論を意味する語であり、実際、『古今集』序は、「つけて」と同義として用いていた。しかし、俊成においては、逆に、歌を詠むことそのものを言う中で用いていた。俊成は、「よそふ」の方法すなわち歌を詠むことであるかのように構えた。方法を前面に押し出した詠歌のありようを志向したのである。

この「よそふ」（「思ひよそへ」）に最初に注目したのは、家郷隆文氏で、氏は、「実在するものとことに対して名付けること、『歌』詞による命名作用そのものが、『思ひよそへ』である」と定義づけている。[7]「命名作用」とは、わかりにくいが、「現実的な存在」と「観念的な存在としての歌ことば」との間に「同等または近似の関係を設定することをいう」のだそうで、本稿で『古今集』序の「～つけて」に関して述べたことと近い。「現実的な存在」という点に関しては、否定されるべきであるが、「思ひよそへ」の重要性に鋭く着目した論であるといえよう。家郷氏はここから、俊成の援用する『摩訶止観』とのアナロジーから、「思ひよそへ」の感性的認識の機構へと論を展開しているが、本稿ではそのような思想的、観念的な発想をとらず、方法論の問題として捉え返しておきたい。俊成の「よそふ」の用法をもう少し拾っておく。

『古来風躰抄』の別の箇所では、二例見られた。まず、『摩訶止観』と歌とのアナロジーを論じた部分で、

この歌の善き悪しき、深き心を知らむことも、ことばを以て述べがたきを、これによそへてぞ、同じく思ひやるべきなり。

これは、詠歌の方法について言っているのではないが、擬するというような意味であり、前に見た「よそふ」の語の意味用法から出るものではない。もうひとつは、『万葉集』からの秀歌撰のうち、「かひやがした」の歌の左注的記述中にあり、

おのおの宿を恋ふらんのよしによそへたるなり。

とある。「よそへ」の語を比喩の説明に用いているのである。『古今集』序と同様の用法であることが確認できる。

『古今問答』は、前節でとりあげた『古今集』序の冒頭の一節について、自明のことであったのか、あまり言をさいていない。和歌表現の世界の記述についてもそれは同様であるが、わずかに次のことばに注目される。

花をそふ　花をたづねなどする心也。

おとこ山のむかしを思ひいでて女郎花のひとときをくねる

これらはよそへいへることどもなり。ふかきことにはをよばず。

第一例は、「花をそふとて、たよりなき所にまどひ」の一節について説明したもので、「たよりなき所にまどひ」に関連させて実態的にことばを補ったにすぎず、「そふ」の語そのものについては注していない。第二例は、前に引用した番号でいえば、⑩と⑪にあたるものであり、「よそへ」の語によって注を加えている。それぞれのふまえた歌は、

⑩今こそあれわれも昔は男山さかゆく時もありこしものを

（雑上・八八九）

⑪秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひとときに

（誹諧歌・一〇一六）

であり、比較の対象と比喩の歌で、ここでも、俊成は「よそへ」の語を『古今集』序と同様に用いている。

歌合判詞における、俊成の「よそへ」の用例は次のようである。

①なにごとをまつとはなしにながらへていつすみよしと思ふべき身ぞ

（兵衛佐）

（略）いつすみよしとなどよそへたるはをかしきやうなれど、をはりのことばいひすてたるやうにやあらむ、

（『住吉社歌合』述懐・廿五番左）

②あるいは、絵にかける女にたとへ、しぼめる花のにほひのこれるによそへ、或は商人のよききぬきたるといひ、田夫の花の陰にやすめるがごとし。

（『御裳濯河歌合』一番判詞）

③衣手は清見が関にあらねどもたゆるよもなきなみだなりけり

（経家）

（略）清見が関になみだのたえざるやうにきこゆ。

（略）清見が関になみたえずとよそへたるを、たの字のそへることすこしはさることなれど、よそふる歌はかやうのこともつねのことなり。

（『六百番歌合』寄関恋・十九番右）

④すみなれしひとはこずゑにたえはててことのねにのみかよふ松風

（有家）

（略）こずゑにひとのたゆるやうなることはさもあることなれど、よそふることはかやうにいふもつねの例なるうへ、すみなれしひとはこずゑにといへる、姿よろしく聞こえて、下句もまた優なるべし。

（『六百番歌合』寄琴恋・十二番左）

⑤今さらにたれに心をうつすらんわれと墨絵はかきたえにけり

（有家）

（略）われと墨絵はなどよそへいへる、をかしくたくむといへるなるべし。

（『六百番歌合』寄絵恋・十四番左）

⑥草ふかき夏野わけゆくさを鹿のねをこそたてね露ぞこぼるる

（左大臣）

（略）よそへといひ、姿といひ、まことにをかしくこそ侍れ。

（『水無瀬恋十五首歌合』春恋・九番左）

①③④は掛詞、②⑤は比喩をさして「よそへ」と評している。旧来の用法の域を出ていないが、個々の歌の批評である歌合判詞だか

らである。注目すべきは⑥の例で、「よそへ」が「姿」の対概念として用いられている。「姿」が歌が詠まれた結果としてのかたちとするなら、「よそへ」とはそこに仕立てられていく過程であることになろう。

良経の「草ふかき」の歌は、歌合でも家隆歌に勝ち、『新古今集』巻十二・恋二・一一〇一に所収、当時も評価の高い歌であった。本歌は、

夏野ゆくを鹿の角のつかのまも妹が心を忘れて思へや
（『万葉集』巻四・五〇二、人麻呂）

という恋の歌で、良経歌は、初句・二句を取って二・三句にすえ、鹿の鳴き声と露を配した。鹿の鳴き声は人の泣く声を掛け、露は涙をたとえ、歌のことばの表には恋の詞はないが、恋の歌を本歌取し、和歌表現の伝統的な掛詞や比喩によって、ことばに恋のイメージをただよわせ、春恋の心を主題的に表現しえている。掛詞や比喩、さらにさまざまなことばのイメージを駆使して、初句から末句まで効果的に配して、一首の歌を仕立てあげた。この歌は、そのように「よそへ」られた歌だと言う。「よそふ」とは、「つく」などとほぼ同義で使われ、名づけ、関係づけを意味することは前に述べた。「よそふ」の語源が、「寄し」に「そふ」がついたという[8]のは、本稿の問題意識に即して、出来すぎというものである。俊成の「よそへ」も、名づけ、関係づけを方法とした、『古今集』以来の伝統をふまえている。しかし、ここでは、現実の景物と心とではなく、伝統的な歌のことばとことばの関係づけ、組み合わせである。それが、俊成の「よそへ」の方法なのである。

『古来風躰抄』の和歌表現世界の具体例を記述した部分を、前にならって春の部のみ引用しておく。

春の初め　①雪のうちより咲き出でたる軒近き紅梅、賤の垣根の梅も
→色はことごとながら、にほひは同じく手折るそでにも移り、香り身にしむ心地するを

花の盛りになりぬれば　②吉野の山の桜は→残れる雪にまがひ
③まして雲居の花の盛りは
→白雲の重なれるかと心も及び難きを

春深くなるまには　④井手の山吹に蛙の鳴き、岸の藤波に夕べの鶯春の名残を惜しみ顔なるなども
→さまざま身にしむ心地するを
⑤岩垣沼のかきつばた、山下照らす岩つつじなどまで
→ほどにつけては心移らぬにあらず

→印で前項と後項とに分けてみたが、そのこと自体かなり無理があるというものだろう。「～つけて」や「～よそへて」の語がないからである。要するに、「見るもの聞くものにつけて→心に思ふことを言ひいだせるなり」の古今的図式にあてはまらないのである。それぞれ、典拠となっている歌はつぎのとおりである。

①かばかりのにほひなりとも梅の花賤の垣根を思ひ忘るな
（『後拾遺集』春上・六一、弁乳母）

折りつれば袖こそにほへ梅の花ありとやここに鶯の鳴く
（『古今集』春上・三二、よみ人しらず）

②み吉野の山べに咲ける桜花雪かとのみぞあやまたれける
（『古今集』春上・六〇、紀友則）

③九重に立つ白雲と見えつるは大内山の桜なりけり
（『詞花集』春・二三、前斎院出雲）

④蛙鳴く井手の山吹散りにけり花の盛にあはましものを

（『古今集』春下・一二五、よみ人しらず）

わが宿の藤の色こきたそかれに尋ねやは来ぬ春のなごりを

（『源氏物語』「藤裏葉」巻）

なぐさむるかたやなからむ花も散り春も暮れゆく鶯の声

（『永久百首』春、大進）

⑤風吹けば岩垣沼のかきつばた浪の折るにぞまかせたりける

（『堀河百首』春、大江匡房）

入り日さす夕紅の色はえて山下照らす岩つつじかな

（『金葉集』春・八四、参河）

『古来風躰抄』の記述は、歌の表現そのままに、前項から後項へ、モチーフから方法を介して主題へと推移していくという単純な図式ではない。①では、前項に『後拾遺集』歌の「賤の垣根の梅の花」を配し、後項に『古今集』歌の「折りつれば袖こそにほへ」が引かれ、両者合わせて、「香り身にしむ心地する」というのである。②③は『古今集』序と同様の図式で前項から後項へと展開し、④⑤は前項のみに歌の表現がふまえられ、後項に歌のことばにない「身にしむ心地する」「心移らぬにあらず」の感情・感覚が主題として表現されている。

前項・後項の関係自体がここでは、無効である。『古今集』序では、前項は現実の景物、後項は人の心であったが、『古来風躰抄』では、前項から後項もともに歌ことばである。前項から後項へ、後項から前項へ、自在にことばは往還し響き合って、何らかの感情・感覚が主題的に表現される。伝統的なことばとことばの関係づけ、組み合わせによって、主題が表現されていく。繰り返していえば、その方法を俊成は、「よそへ」と言ったのである。

俊成が、詠歌の根源として「もとのこころ」の確立を言い、理想の歌の姿として「艶」や「景気」、または「幽玄」をめざしたことは、従来さまざま論じられてきたとおりであり、それらをここで否定するものではない。歌の本質や理想のありかたはそれとして、本稿は、歌の本質や理想を実現してゆく方法論を、出発点にもどるかようにして、考察してみたものである。

〈注〉

（1）鈴木日出男『古代和歌史論』（平2・10）

（2）阿部秋生・秋山虔・今井源衛『源氏物語一』（日本古典文学全集）に拠る。

（3）尼ヶ崎彬『日本のレトリック』（昭63・1）に、見立てについて「常識的な文法や連想関係からは結びつかぬものを、類似の発見によって（ないしは類似の設定によって）結びつけ、それによって主題となっているものに新たな《物の見方》を適用し、新しい意味を（または忘れられていた意味を）読者に認識させるものである」とある。示唆されたこと大であるが、この書の論点に従えば、名づけ、関係づけの方法は、「新たな《物の見方》」すなわち新しい名や関係の認識を方法化したものといいかえることができる。しかし、和歌表現には、歌のことばの問題について第二節末に述べたように、認識論に即しえない点が多々ある。

（4）通行の辞典類の意味説明を見ても、なぞらえる、たとえる、見立てる、擬す、近づける、などとあるが、これでは、序詞、掛詞の例をすくいきれない（唯一、『角川古語辞典』「そふ」⑤に「寓意を持たせる。和歌で懸詞によって二重の意味を詠み込むことをもいう」とある）。『日本国語大辞典』「つける」二⑥「よせる」⑧「よそえる」②や『岩波古語辞典』「よせ」②⑧にあるような、関連させる、関係づける、などが、意味としてふさわしい。

（5）土方洋一氏は、『歌経標式』に見える「喩」の語は、枕詞、掛

詞、序詞、縁語、見立てから主語述語や修飾被修飾の関係、係り受け、言い換え、畳み重ねなどの意味まで守備範囲が広がっていることを指摘している（「『歌経標式』の〈喩〉をめぐって」『青山語文』18号、昭63・3）。しかし、今のところ、それらを包括して〈喩〉の名において呼ぶことははばかられる。

（6）注（1）参照。

（7）家郷隆文「俊成の「思ひ寄そへ」思考――『古来風体抄』の場合――」（『藤女子大学国文学雑誌』21号、昭和52・4）

（8）『岩波古語辞典』「よそへ」の項に、「ヨシ（寄）ソヘ（添）の約か。甲を乙に引き寄せて並べ、両者を関係があるとする意」とある。

本文は、通行の活字本に拠った。『古来風躰抄』は、再撰本である。歌番号は、『新編国歌大観』に拠る。表記は私に改めたところがある。

なお、本稿は、平成二年度文部省科学研究費奨励研究(A)による成果の一部である。